

津 田 梅 子 考

眞 崎 良 幸

When you hear the name Umeko Tsuda, what do you know about her? You will probably know that she is the founder of Tsuda juku college and that she went to America at the age of eight and stayed and was educated there for ten years. You will also know that she was one of the feminist right movement leaders and that she remained single all through her life. But what is her position in the history of the English language in Japan? Let's take a look.

The first pioneers who came near to mastering English, even before the Meiji Restoration, were Manjiro Nakahama (John Mung) and Hikozo Hamada (Joseph Heco). They contributed their English ability to Japan's modernization by helping the Japanese leaders who made the Restoration possible. Ironically, they learned English by accident. Their ships were wrecked at sea, and they were rescued by Americans and taken to the United States. As they were studious in their early teens, they learned English quickly and were loved by Americans. One interesting contrast between these two is that while John Mung remained Japanese. Joseph Heco was naturalized and became an American citizen. One helped Japan from the Japanese side, the other from the American side. They were both indeed great contributors to our country.

After the Meiji Restoration there were a group of English pioneers

who sprang up under the Government's policy of Westernization. We must not also forget the contribution of distinguished Western teachers hired by the Government for its public schools. The contribution of those Westerners was so great that, without it, the production of our pioneers would have been impossible, especially those students who got higher education during the ten years between the 5th and 15th year of Meiji. They were virtually studying abroad as every subject was taught in English. Naturally those students became very fluent and proficient in English; however, they did not lose their Japanese spirit. Inazo Nitobe and Kanzo Uchimura were classmates at Sapporo Noh Gakko. They were taught by Americans who based education on Christianity and Puritan ethics. Also, Tenshin Okakura, a graduate of Tokyo University, was influenced by his philosophy teacher, Ernest Fenollosa, who studied Japanese art. Hidesaburo Saito was the only person to master English without ever going overseas, learning from foreigners during his eleven years as a student. The list of these early pioneers of the English language seems endless: Jukichi Inoue, Naibu Kanda, Yoshisaburo Okakura and others.

Among those English masters was Umeko Tsuda. Let us take a closer look at her life in an interview form.

オリバー: こんにちは、オリバー・トウェインです。オリバーズ・トーク・ショーへようこそ。今日は歴史上の人物をお招きして皆さんにご紹介いたします。ごゆっくりお楽しみください。

今日のゲストは津田梅子さんです。彼女は日本人で、7歳のときアメリカに留学しました。アメリカ人の献身と親切ですくすく育ち、立派な教育を受けて、日本で英語教師となり、日本の女子教育に大きな功績を残した人です。

さて、ここに天国にいる人たちと皆さんとをつなぐコンピューターがありま

す。このボタンを押すと、これらの人々と話ができるのです。今日はこの機械を試す歴史的瞬間をごらん下さい。必要な情報をインプットします。さあ、これでよし。ご覧ください、津田梅子さん、登場です！成功、大成功です。夢ではありません。津田さん、こんにちは。こちらの声が聞こえますか？

梅子：はい、よく聞こえます。

オリバー：みなさん、お聞きになりましたか。津田梅子さんの声です。津田さん、今日お呼びしたのはあなたの生きてきた道のりを世界に知ってもらおうと思ったからです。あなたを知るチャンスのある人は、あの名門津田塾大学に入学できた人以外はあまりいません。あなたの女子教育に対する努力と献身は、次の世代に伝えていかなければならない大事なものだと思います。津田さんがお話をしてくださればこれ以上の光栄はありません。

梅子：こちらこそ。私の人生に興味をお持ちの方に聞いていただけるなんて、私こそ幸せ者ですわ。皆さんのお知りになりたいことは何でもお話しいたします。

オリバー：津田女史の温かいおことばです。ありがとうございます。

梅子：女史はよしてください。むめと呼んでください。生まれたときからの名前です。

オリバー：それじゃあ、むめさん、まずお名前のことからお伺いしたいと思います。その名前はどのようにつけられたのですか？

梅子：ああ、これですね。私の生まれは1864年12月3日です。津田仙（当時28歳）とはつこ（当時23歳）の次女として江戸（今の東京）に生を得ました。私が生まれたとき、父は私が女であることに失望して、その夜は遅くなるまで帰ってきませんでした。ひどい父でしょう？一週間たって、まだ、名無しのごんべえでしたの。母は私を不憫に思い、部屋にあった鉢植えの梅の花にち

なんで「むめ」と名づけてくれました。文字どおり梅の花という意味なんです。

オリバー：ご両親はどんな方でしたか？

梅子：父は徳川家に仕えていた武士でした。父の得意の学問は、漢書や日本外史で、書道にも優れた才能を発揮しました。武芸では、馬術や、当時剣術といわれていた剣道が得意でした。父の人生を大きく変えたのはペリー提督が浦賀沖に戦艦をつけて日本に開国を迫った時のことです。当時の徳川幕府はあわてふためきました。日本中が混乱しました。父は、今の外務省に当たる外国奉行に勤務していましたので、これから先は西洋のことを学ばなければならない時代が来たことを痛感したのです。そして、オランダ語と英語を学び始めました。父は学問をとっても大事にした人です。私が4歳のときから、読み書きの練習をさせようと考えました。そればかりか、琴、三味線、舞など、日本の伝統的遊芸も習わせました。母は縁の下の力持ちとして父を助けました。彼女は典型的な日本の母親の優しさと愛情を持っていた人でした。

オリバー：あなたは日本初の女子留学生として太平洋を渡り、「アメリカ」を体験したんですね。どんな事情でそうなったのですか？

梅子：明治維新の数年前のことです。北海道開拓使、黒田清隆さんが、開拓の顧問を探すためにアメリカに行かれました。グラント大統領にお会いになり、ホレス・ケプロンという人の紹介を得ました。ケプロン氏は承諾し、来日して、その後10年間北海道の開拓に貢献しました。黒田さんはアメリカにいらしたとき、森有礼さんにお会いになりました。森さんは日本公使として滞米されていたのです。黒田さんは森さんにこう言われました。「日本を文明国にする近道は西洋の女性と結婚することだよ。森君、君が模範を示して、アメリカ女性と結婚してみないかね」森さんは笑いながら「冗談はよして下さい。でも、女子教育は将来の日本にとって大切なことです。日本の女性の閉ざされた門を開くために何かできることはありませんかね」とおっしゃったのです。黒田氏は帰国後、政府の後押しで女子をアメリカへ留学させようと提案しました。岩倉具

視卿はこれに同意して、明治4年の岩倉使節団と一緒にアメリカへ行く女子留学生を募集しました。しかし、この目的のために我が娘を外国へやろう、などという親はほとんどいませんでした。当時の女性の役割は男性とは大いに異なり、小さく、低い役割に甘んじていたのです。その結果、応募したのはたったの5人でした。当然みんな合格しました。「幸運」の矢を射止めた5人とは、吉松亮子（15歳）、上田貞子（15歳）、山川捨松（12歳）、永井繁子（9歳）、そして7歳の私でした。でも、みんなラッキーだなんて思いませんでしたの。だって誰も歓迎してくれないんですもの。それにしても、山川さんの「捨松」って変な名前でしょう？ 彼女、本当は咲子っていうの。でも母親は彼女を手放さなければならなかったの、「捨てるつもりで待つ」という意味を込めて「捨松」ってつけたのよ。

オリバー：岩倉使節団とはどんなものだったのですか？

梅子：この使節団の目的は2つありました。ひとつは、日本がアメリカやヨーロッパの国々と結んだ「不平等」条約改正の下準備です。もうひとつは新生日本の指導者たちが西洋文明とはどんなものかを見て、日本の模範にしたかったのです。5人の留学生はアメリカに留まりましたが指導者たちはヨーロッパからロシアへと回りました。岩倉卿と一緒にいった人たちは、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文という歴史に残るそうそうたるメンバーでした。総数107名の大所帯でした。日本を発つ前に皇后さまよりお祝いのお言葉と贈り物を賜りました。お言葉といっても皇后さまが直接お話しになるわけではありません。代理の女官が代読するのです。その時のことははっきりと覚えています。日記にこう記しています。

7歳の子供の頃の記憶は、がっしりした石堀、広い門そして御殿のような廊下を宮廷の貴女たちが引きずって歩く絹の衣ずれの音。その向こうに大きな部屋があった。重々しいたれ幕がかかって、そこから向こうは、たとえお辞儀をした頭を上げて何にも見えない。が、そこには皇后さまがお座りになってい

ることをみんな知っていた。

オリバー：そういう時代もあったのですね。天皇と皇后はみんなの手の届かぬ存在だったのですね。今は自由で民主的な社会になりました。天皇は第二次大戦までのような神ではなくなりました。今は天皇の顔を見ることだってできます。直接声を聞くこともできます。天皇も私たち同様、人間になったのです。この変化はいいことだと思います。

梅子：私もそう思うわ。でも、そんなに変わったなんて信じられないくらい。天皇が神でなくなるなんて。でも、本当に良かったわ。これで天皇も私たち同様、人間としての喜びや悲しみを味わうことがおできになるのね。

オリバー：さて、皇后のお言葉をいただいて日本を後にされたわけですが、出発のときの様子を聞かせて下さい。

梅子：ええ。東京を立ったのは1971年（明治4年）12月21日でした。まず、横浜に向かいました。多くの名士たちが見送りにいらしてましたわ。12月23日、サンフランシスコに向けて出発しました。多くの人達に見送られ祝砲が鳴らされました。天気は快晴でした。日本からだんだん離れていく時、胸がドキドキしていましたわ。

オリバー：アメリカまで何日かかりましたか？ また、船旅はいかがでしたか？

梅子：二十三日かかって1月15日にサンフランシスコに着きました。日本を出てから一週間くらい船酔いが治りませんでした。船中の生活は楽しいものではありません。食べ物も口に合わないし、言葉も通じないために苦勞しました。当時は英語のえの字もしゃべれませんでした。また、船酔いと頭痛でよく眠れませんでした。とはいっても、楽しいときもありました。船内を走り回り、甲板に通じる真鑄の階段を昇ったり降ったりしたことを覚えております。みかんを一箱買って、みんなで食べたことも楽しい思い出のひとつでしたわ。

オリバー：アメリカの第一印象はどんなものでしたか？

梅子：サンフランシスコのゴールデン・ゲイト・ブリッジを見たときはとても嬉しかったわ。「やっと着いた」というのが本音です。それから、すべてのものが変わってるなァと思いました。人も、景色も。でも、家は日本のものとあまり変わらないなァと思いました。少なくとも家の目的は世界中同じですものね。

オリバー：そうですね。それから、サンフランシスコで何をなさったのですか？

梅子：サンフランシスコに着いた日はグランドホテルという文字どおりの豪華ホテルに泊まりました。こんなホテルは初めてでした。翌日、ホテルの前に多くの群衆が集まっていました。市長や名士や市民のかたたちが私たちの到着を歓迎して集まってくれたのです。岩倉卿がバルコニーから日本語で挨拶をしました。そして同行の代理大使チャールズ・デロング氏が通訳しました。われんばかりの拍手喝采でした。私たちは大歓迎されていることが分かりました。あとで、大雪のために列車が不通になっていることを聞きました。2週間ぐらい遅れるとのことでした。出発を待つ2週間のあいだアメリカ人はとても親切にしてくれ、町を案内したり、学校や観劇に連れていってくれました。しかし、彼等の接待が嫌になるときもありました。それは私たちを好奇の目でじっと見つめたり、着物や髪型が珍しくてじろじろ見たり、袖を持って私たちが身につけているものを穴のあくほど見つめるからです。まるで宇宙からやって来たエイリアンみたいに。私は子供ながらに、どうやって逃げようかしらと悩んだこともありました。

オリバー：それはおもしろい。今の日本人がガイジンを見る目とそっくりですね。ところで、サンフランシスコでは何か怖い経験はありましたか？

梅子：ええ、ありました。黒人が死ぬほど怖かったわ。ホテルで黒人のウェイターが現れたときの怖さってなかったわ。また現れるのではないかしら、と

思うだけで震えが止まらなかったんです。わずか7歳の日本人にとって顔や形が違うということだけでショックだったのね。でもね、オリバー、アメリカに長く滞在し、教育を受けて分かったんだけど、黒人も私たちと同じ人間なのよね。黒人の友達もできたわ。たとえ肌の色が違って、心の中を見れば、外見の美醜というものはほんの皮膚一枚によって隔てられているに過ぎないことが分かるわ。皮膚の向こう側には優しい心が微笑んでいるんだわ。

オリバー：全く同感です。さて、旅の続きを伺いましょう。サンフランシスコに半月滞在して、それからどうなさったのですか。

梅子：サンフランシスコを発ったのは1月31日。サクラメントからソルト・レイク・シティに行きました。そこでまた大雪に遭いました。17日間立ち往生して、2月25日にシカゴに着きました。シカゴは前年の大火災からまだ立ち直っておらず、岩倉卿は、お見舞金として5000ドル寄付しました。シカゴから、私たちの目的地ワシントンに到着しました。その日はアーリントン・ホテルで一泊、ここで使節団と別れました。使節団はそこからシギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ロシアを回って日本へ帰ったのです。私たち5人はアメリカの家庭に引き取られました。私はジョージタウンのランマン夫妻のお世話になりました。ジョージタウンは1878年、ワシントンに合併され、今では西ワシントンとなっています。人口12,000人の小さな町で、ロック・クリークという溪谷を挟んでワシントン市に面していました。この時、横浜を出てからすでに70日が経っていました。

オリバー：女子留学生5人ともずっとそこにいたのですか。

梅子：いいえ、人はそれからコネチカット通りに移されました。そこで毎日2時間の英語の勉強と、週に2回のピアノのレッスンを受けました。でもその時は余り勉強熱心とは言えませんでした。それで森さんからよく言われたんです。「きみたちは、日本にいる他の女性のことを考えたことがあるかね。彼女たちは勉強したくても学校がないんだよ。君たちは千載一遇のチャンスを与えられ

た幸運児なんだ。がんばらなくっちゃ。もっと勉強して、日本政府の期待に応えてくれなきゃだめだよ」このような退屈な勉強が半年間続きました。そして、悲しい出来事が起こったんです。亮子さんと貞子さんが病気になる、帰国しなければなりませんでした。2人の先輩が途中で帰国する姿を見るのは悲しいことでした。残された3人はそれぞれアメリカの家庭に預けられました。捨松はニュー・ヘイブンのレオナルド・バーコン神父のもとに、繁子はフェア・ヘイブンのジョン・アボット神父のもとに、そして私はランマン夫妻に預けられ、その後11年間お世話になったのです。

オリバー：ランマン夫妻のもとで過ごした11年間はむめさんの成功の鍵といえるのではないですか？

梅子：自分が成功者かどうかは分かりませんが、確かに私の精神的発達に関して言えば、ランマン夫妻は私を「生んでくれた」人たちでした。キリストを信じる心も、人生のすばらしさも、みんな教えてくれたのはこの2人です。彼等は私の父であり、母であります。彼らがいなかったなら私の人生は全く違ったものになっていたでしょう。

オリバー：ランマン夫妻はどんな人たちでしたか？

梅子：チャールズ・ランマンさんは1819年ミシガン州モンローで生まれました。コネチカット州のプレーンフィールドで会計士になるための教育を受けました。しかし、父親が彼を商人にしようとする努力にもかかわらず、彼の興味は文学にありました。彼には文学上の友人がたくさんいました。H. W. ロングフェロー、チャールズ・ディキンズ、ワシントン・アービング、ダニエル・ウェブスター等々です。彼は物を書いていないときは外に出て自然の中に身を置くことが好きでした。よく川や湖に釣りに出かけていました。美しい自然の風景画を書くのが好きでした。1849年にアメリカ陸軍省の司書官を勤め、1871年には書記官として日本公使館に勤めました。

ランマン婦人は私の母によく手紙を書きました。母は英語のえの字も分かり

ませんでした。訳された手紙を読んで、日本語で返事を書いていました。でも、二人は意志の疎通がうまくいき、とても良い関係ができていました。ランマン夫妻には子供がいませんでした。だから私を自分たちの子のように育ててくれました。彼らは大金持ちではありませんでしたが、暇があれば旅行に出かける余裕はありました。時々一緒に連れていってもらい、壮大な自然に驚かされたり、アメリカ人の親切に感動したりしたものです。

オリバー：さて、梅子さんの小学校時代の話をお聞きしたいですね。

梅子：分かりました。私はスティーブンソン・セミナリーという小学校に行きました。小さな学校で生徒数は50人ぐらいでした。でも、とても評判の良い学校だったんですよ。

オリバー：むめさん、ここでお許しを得て、ランマン夫人に登場してもらって、いろいろお話を伺いたいのですが、よろしいでしょうか？

梅子：えっ、ランマン夫人に会えるの？ すばらしいわ。

オリバー：お顔をご覧になって声を聞くことはできますが、残念ながらお互いに会話を交わすことはできません。さあ、呼び出してみましょう。ランマン夫人、こんにちわ。

ランマン：こんにちわ。聞こえますか？

オリバー：はい、はっきり聞こえます。ランマン夫人、今日はスタジオに、あなたがとても大事に育てられた津田梅子さんがいらっしゃるんですよ。今日は彼女の思い出を語ってもらえないかとお呼びたていたしました。

ランマン：ええ、喜んでお話ししますわ。梅子の思い出はいつも新鮮で、ほのぼのとしたものです。彼女が私たちの家にやって来たのは、たしか、1872年2月29日でした。初めの2か月間泊まって、それから10月まで他の女子留学生と一緒にワシントンに行ったわ。そして、また戻ってきたの。それからしばらく

して「日本からアメリカへ」という英作文を書いてくれたんです。そうね、300語ぐらいで書かれたアメリカ旅行記だったわ。アメリカに来てまだ9か月しか経っていなかったのに、今まで「ありがとう」と「はい」と「いいえ」だけしか知らなかった娘があんな立派な作文を書くなで驚きました。これは彼女が聡明な頭を持っていた証拠です。それから2年後には、英語をすらすらしゃべることができるだけでなく、文章も上手になり、思想もしっかりしてきました。だけど、日本語が犠牲になっちゃったわ。この頃にはすっかり日本語は忘れてしまいました。

オリバー：彼女の洗礼についてお話いただけませんか？

ランマン：私どもは毎週日曜日に、彼女を教会に連れて行きました。もちろん、この娘がキリスト教徒になることは私どもの喜びでしたわ。でも、私どもの宗教を押しつけたくはありませんでした。彼女が私どもの家にまいりました1年後の1873年に、自ら洗礼したいと申しましたの。私どもは喜んだのですが、彼女に宗教的偏見は持ってほしくなかったのです。私どもの宗派はエピスコopal教会でした。しかし彼女にはプレスビテリアン教会の質素な礼拝がいいと思っていましたので、夫の友人でもあるオールド・スウィーズ教会のオクタビウス・ペリンチェフ神父に頼んだわけです。ペリンチェフ神父は梅子に小児洗礼を授けようと思っていましたが、彼女と直接話してみると、驚いたことに、立派な受け答えのできる子だったので普通の洗礼を授けることにしたのです。時は1873年7月13日でした。今でもはっきり覚えていますわ。古い会堂に真夏の夕日が差し込み、あたかもこの光景を祝福しているかのようでした。私どもの他にも出席者がいました。式が始まると、この娘は祭壇の前まで歩き、そこでひざまずきました。神父の静かで厳かな声が響きわたりました。この時の感動と喜びは今でも忘れません。日本から見知らぬ国アメリカへやって来て、初めて宗教に誓いを立てようとするあどけない少女——もう、目頭が熱くなってまいりました。

オリバー：彼女の敬虔さをあらわすようなエピソードはありませんか？

ランマン：ええあるわ。私どもの家にジェフリー・セーベルとマーガレットという二人の黒人夫婦が働いていたんです。二人は庭の隅の家に住んでいました。高い教育を受けていたわけでもありませんが、梅子は毎週日曜日にこの夫婦を訪れていましたの。梅子が日本に帰国したある日のこと、ジェフリーと夫が幸福とは何かということを話し合っていました。そのときジェフリーがこう言ったんです。「あの娘は本を小脇に挟んで、よく家に来ていました。その本を開けて、一行読み、意味を説明するんです。それから目を閉じて神にお祈りをしていました。マーガレットはもういません。天国へ行ってしまうしました。でも、マーガレットが天国に行けたのはあの娘のお陰です。梅子は本当に天使のような娘だった」と。

オリバー：梅子さんの学校の成績はどうでしたか。小学校時代の成績は良かったのでしょうか。

ランマン：ええ、もちろんです。アメリカの子供より2、3年進んでいました。詩がとっても好きな娘で、読んだ詩はほとんど暗記していました。大勢の前で詩の朗読をやったこともあるんです。その詩というのは C. W. ブライアントの作品で「白い脚の鹿」という題でした。

百年前のこと。

森の小路で旅人がふと目にしたのは、

野生の鹿が水を飲み、

白樺の小枝を噛みとるさま。

梅子は一か所の間違いもなく、一語一語をかみしめるように明瞭な声で朗読しました。夫は自著の中で次のように書いております。

私はこの著名な詩人に手紙を書く機会があったが、その中で、私が後見役を勤めている、当時10歳にもなっていなかった、津田梅子が通学してい

る私立学校で多くの賞をもらったことを書いた。また、彼女は詩が好きで、「色い脚の鹿」の詩を大勢の聴衆の前で、ひとつの誤りもなく、見事に暗唱したこと、また彼女の許可を得て、彼女が敬愛する、この偉大な詩人に写真を同封していることを告げた。

そして夫はブライアント氏から次の返事を受け取りました。

拝啓

お手紙の中のほほえましいお話、ありがとうございます。津田梅子さんに、写真のこと、お礼を申して下さい。私はこの写真を大切に保存させていただきます。その愛すべき性格によって、ホームステイの家族から愛された人の肖像として。

あの「白い脚の鹿」の詩の中に少しでも取り柄があるとすれば、それは無力な動物に対する思いやりを教えようとしているからではないでしょうか。彼女はこの詩のことは忘れてしまうかもしれません。大した詩ではありませんから。でも、その教訓は、いつまでも生き続けることを願っております。

敬具

W. C. ブライアント

オリバー：何と美しい手紙ではありませんか。弱い者に対するこの思いやりの精神こそが、梅子さんが学びとり、後にその教育の中で伝えていこうとされたものではないのでしょうか。ランマン夫人、いろいろ貴重なお話、ありがとうございました。

ランマン：どういたしまして。梅子によろしくお伝えください。彼女はいつも私の心の中に生きております。

オリバー：わかりました。むめさん、お聞きになりましたか？ ランマン夫人のお話を伺って、あなたの小学校時代のことがよくわかりました。さて、話を

進めさせていただきます。スティーブンソン・セミナリー小学校卒業後はどうなされたのですか？

梅子：1878（明治11年）の夏、スティーブンソン・セミナリーを卒業して、その年の秋にアーチャー・インスティテュート中学に入学いたしました。これはワシントン市内のマサチューセッツ通りにある女子中学校です。生徒数は100名ぐらいでした。小さな学校でしたが、立派な先生がたくさんいらっしゃいました。教育の質はとても高いものでした。卒業式には有名人がたくさん参列されていました。ヘイズ大統領夫人が列席され、お祝いの言葉を述べられたこともあります。

オリバー：そこでどんな学科を勉強されましたか？ また、いちばん好きな学科は何でしたか？

梅子：英文学、心理学、天文学、数学、フランス語、ラテン語、音楽、美術などを勉強しました。特に好きな学科は詩と小説を読むことでした。好きな詩人はワーズワース、バイロン、テニソン、ロングフェローそしてブライアントです。シェークスピアの作品も大好きでした。

オリバー：ここに1882（明治15年）、アーチャー・インスティテュートの教授が書いたあなたの成績のコメントがあります。

津田梅子のラテン語、数学、物理、天文学、フランス語の教科における進歩は他の生徒を凌ぐものがあり、彼女は研究するすべての分野において深い洞察力を持っております。このことを証明できることは私たちの大きな喜びであります。

これはまさにあなたの勤勉を証明するものです。ところで、当時のあなたの英語力を示すようなものがあれば日本で英語を学ぶ人たちにとって興味があると思いますが、そんなものがありますか？

梅子：そうですね。私が1897（明治12年）に書いた作文はどうでしょうか。これは、私が16歳の時のものです。

オリバー：それは興味深いことです。見せていただけますか？

梅子：わかりました。ランマン夫妻は夏休みによく旅行に連れて行ってくれました。この作文は1879年の夏休みの旅行記です。題は「夏休みの思い出」となっています。読んでみましょう。

楽しい夏休み旅行は数多く経験したが、去年の旅行ほど、有意義であるばかりか、楽しく、興味ある旅はなかった。世界の自然の驚異であるナイアガラの滝を見に行った。さらに大きな湖を見て、ミシシッピの東側にあるアメリカ第2の高山に登り、頂上から眼下の美しい景色を見下ろした。

そこで、できるだけ手短かにこの旅のことを書く必要を感じる。というのは、私が見て感じたものを全部書けば、用紙が何枚あってもたりないでしょうから。

7月の快晴の日、親切な友人と私は、朝早くワシントンを出発してペンシルバニアを越え、夕方遅くセネカ湖の突端にあるワトキンズ・グレンという美しい場所に着いた。この峡谷の写真はよく見たことがあり、私なりに想像していたが、実際見てみるとまさに想像を絶するものだった。高くそびえ立つ粘板岩の崖が灌木や木々に覆われ、あたりはさえぎられた陽光のため、暗く、陰鬱で荘厳な雰囲気をかもしだしていた。また、谷間を流れる小川、滝、断崖、そして淵などがこの場所をいっそう魅力的なものにしていた。

ワトキンズ・グレンを後にして次は毎年観光客の多いナイアガラに行った。このすごい速さで流れ落ちる驚嘆すべき滝について私は描写すべきことばを持たないが、ただ言えることは、この光景は一生忘れられない期待以上のものであったということだ。この川を上から眺めるとその力と深さが十分に伝わってくる。

次は、オンタリオ湖を通してトロントに行った。そこで日曜日に宿泊して有名な教会のミサに参加した。

月曜日の朝早く、車でモントリオールに向かい、夜遅く着いたが、翌日は前日の疲れもさほどなく市内見物が十分できた。立派な教会や建物がたくさん立ち並んでいたが、私がいちばんおもしろいと思ったところはモントリオール市場であった。カナダ人の女性が早口のフランス語で自分たちの持ってきた珍しいものを売っているのである。

しかしこの楽しい町も後にしなければならなかったが、次は歴史的連想をかきたてる町、いっそう興味深い古都ケベックを訪れた。その防壁と門は残念ながらほとんどが取り払われていたが、狭くて坂の多い街路、あの有名な大会堂、アブラハムの野、私はこれらにことごとく関心をそそられた。これほど魅力的な町を去るのがとても残念だった。大会堂を歩いていると、ちょうど朝の散歩からお帰りのローヌ伯爵とルイズ王女をお見かけした。

ケベックからホワイト山脈に行ったが、ここに滞在中の目玉はワシントン山に登ることだった。いつになく好天に恵まれ、視界は最高だった。頂上はとても寒かったので、多くの人たちがしたように、終夜とどまることはせず、グレン・ハウスに戻ったが、途中の景色は今までに見たことのない壮大なものであった。

さて、帰路にウィニペソーキー湖に寄り、それからボストンの近くの友人の牧場ですばらしい数週間を過ごした。そしてニューポートで2、3泊、ニューヨークを経由して帰宅した。こうして1979年の夏のすばらしい旅行に終止符が打たれたのである。

オリバー：私はもう20年も日本の中学、高校で英語を教えています、今までに生徒からこんなに上手な英作文をもらったことはありません。日本人は語学がもともと苦手だとか、英語の分野で日本人には期待できないという声がありますが、まさにあなた自身が、それらの声が間違っていることを証明していると思います。ところで、現在の日本の英語教育の問題点は何だとお考えになりますか？

梅子：そうですね。まず、日本の先生方は日本語で英語を教えます。つまり、

英語を音読して日本語訳を与え、文法事項を日本語で説明するわけです。ほとんどの時間は日本語で授業が進められます。これでは生徒にとって英語に接する機会がなくなってしまいます。この現状を考えれば、日本の学生にとって英語が苦手になるのはうなづけます。英語それ自体の理解のために費やされる時間が少なすぎるのです。

オリバー：では、この現状を打破する手段はあるのでしょうか？

梅子：それは日本の先生方の双肩にかかっております。先生方が立ち上がって、コミュニケーションの重要性を叫び、それが今の世界にどれだけ必要かということが認識されれば事態は改善されるでしょう。しかし、そうでなければ、英語は、旧態依然として、数学のように機械的に、形式的に解くべき科目であるという迷信が支配することになるでしょう。

オリバー：学校とは別に英語の上達法はありますか？

梅子：ええ、あります。現代のテクノロジーの発達に伴って、今や衛星放送や有線放送が家庭で利用できるようになりました。この中にはとても良い英語番組があります。たとえば、初歩の段階では、早見優さんの「Kids English」や「セサミ・ストリート」が普通のテレビで利用できます。もっと上級になれば「ニュートンズ・アップル」、「インサイド・エディション」「20/20」、「Asia Now」、さらにCNN、ABC、BBCのニュース番組も役立つでしょう。これらは衛星放送のある家庭なら誰でも見れるのです。また、有線を取りつけければ「百万人の英語」、「Hello, U. S. A. Today」「速聴! NEWSWEEK」なども楽しめます。これらを自分のレベルに合わせて活用し、放課後、英語のシャワーを浴びるということですね。もうひとつお薦めしたいことは、易しく書かれた英語をたくさん読んで英語の自然な流れを掴むことです。たとえば、日本には「ラダー・エディション」という一連の本があります。それは文学作品を易しい英語に書き改めたものです。語彙のレベルは500語から4000語ぐらいいまです。もし現状のままで日本の学生が英文学の原書に挑戦しても、おそらく歯

が立たないでしょう。それは、さっきも申しました、英語の下地が十分ではないからです。しかし、このような本を読んで、階段を一步一步上がっていけば、最後には目標のレベルに到達することができるのではないかしら。

オリバー：梅子さん、貴重なご意見ありがとうございました。日本の学生がこのアドバイスを有効に利用してほしいものですね。さて、話をもとにもどしますが、アーチャー・インスティテュートで3年間の勉強後、日本に帰国されたわけですが、他の2人、繁子さんと捨松さんはどうされたのですか？

梅子：繁は病気のため、一年前に帰国していました。それで、捨松と私の二人で帰ってまいりました。1882年(明治15年)の10月にサンフランシスコを発ちました。

オリバー：サンフランシスコを発って横浜に着いたのが11月20日でしたね。日本に到着する寸前のお気持ちはどんなものでしたか？

梅子：家族がどんなふうに変わっているかしらと思いました。繁にも会いたかったわ。もう旅も終わりに近づいてくると、ほんとうに長い、長い旅だったなあって思ったわ。あと二、三日で日本に着くことを思うと胸がどきどきしました。日本語はすっかり忘れてしまって、とても残念に思いました。だんだん日本に近づくにつれて、興奮が高まり、何が何だかわからないようになってしまいました。胸はどきどき、顔は赤かぶみたいに紅潮してしまって、お分かりになるかしら、この気持ち？

オリバー：はい、わかるような気がします。東京に着いた時はどんな様子でしたか？

梅子：それはもう、大歓迎をうけました。11人の家族が港まで迎えに来てくれました。みんな喜んでいました。家に帰り着くと、親戚の者たちが歓迎してくれました。それから、隣近所の人たちが毎日のようにやって来て、魚や柿やお菓子を持ってきてくれるんです。また、父は私の無事帰国を祝う手紙をたく

さん受け取りました。

オリバー：日本に帰ってくると大きな風俗習慣の違いがあったと思いますが、日本で一番不便に感じたことはどんなことでしたか？

梅子：家庭生活に関してはさほど不便は感じませんでした。両親はキリスト教徒になっていましたので、毎日、食前後にはお祈りを欠かさず、聖書を日本語で読み、賛美歌を歌い、一緒に神の前でお祈りをしました。日本でもキリスト教徒の生活ができたのは運が良かったと思います。食べ物に関しては、日本食は大好きでしたから問題ありませんでした。何でもおいしかったので、水を得た魚のようでした。両親は気をつけてパンや、ミルクと砂糖の入った紅茶などを用意しようとしたのですが、私はそんな必要はないことを伝えました。何でも食べたんです。昔の味が自然に戻ってきた感じでした。

不便に思ったことは靴を脱ぐ習慣です。この習慣には不慣れであったため、とても不便を感じました。でも、これは日本では必要なことですね。でないと畳や床が傷んでしまいますもの。

オリバー：外国人の中には、日本の風俗習慣や生活様式を無視して自分の国にない物はすべて批判するというような人がいますね。たとえば、むめさんの時代でも日本食に手をつけようとしなかった外国人もいたし、キリスト教徒でない人を標準以下の人間だと決めつけるような宣教師もいましたね。最近では日本人が湾岸戦争でアメリカ支持を躊躇したことに怒っているアメリカ人もいるようですが、こういう人たちをどう思いますか？

梅子：すべての国の習慣や生活様式にはそれぞれの歴史と文化とが深くかかわっています。アメリカ人が家の中で靴を脱がないといったらばやいても仕方ありません。普通アメリカでは玄関までの道路が長いので歩いているうちにある程度は泥が落ちてしまいます。また、アメリカでは日本と違って椅子に座るし、靴が触れる部分は床だけだということも考慮すべきです。家の中で靴を履いておく便利さもあるのです。外国の人達の風俗習慣を考えるとときにはこれら

の長所も見てやらなければなりません。同様に、日本人が湾岸戦争でアメリカ支持を洩ったからといって日本人を非難すべきではありません。日本の歴史をご覧ください。47年前、日本は文字どおり崩壊しました。そしてその廃墟から、新民主憲法を旗印に新しい日本が生まれたのです。日本国憲法第二章第9条にはこう書かれています。

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

そして、この憲法は日本とアメリカの合作だといえるのです。ダグラス・マッカーサー將軍は「回顧録」の中でこう書いています。

「彼（幣原喜重郎首相）は提案しました。新憲法の最終案には、いわゆる戦争放棄の項を入れてくださいと。また彼は日本の軍備を一切廃止したいと述べました…

…私は全く同感でした。私はあらゆる戦争を見てきました。そして、国家間の紛争を解決する手段としての戦争はもう時代後れになったと思っています…

…私がこう発言すると幣原は驚いた様子でした。驚きの余り部屋を出るとき興奮気味でした。彼は目に涙を浮かべてこう言いました、『世界は私たちのことをあざ笑って、現実離れした夢想家だということかもしれません。しかし、今から百年後私たちが予言者だといわれる時代がきっと来ることを信じています』と」

私も、彼らが予言者だったといえる時代——武力を一切行使する必要のない時代——の到来を強く待ち望んでおります。

オリバー：全く同感です。さて、アメリカから戻られた1年後、あなたは伊

藤博文の自宅に住み込まれていますが、これはどういうことですか？

梅子：あれは天皇誕生日の11月3日のことでした。井上馨外務大臣のお宅で伊藤公と2度目の面会をしました。一回目は1871年に岩倉使節団と一緒に日本を発つ時でした。伊藤公も使節団の一員で、私はそのとき7歳でした。このパーティーでお会いしたときは何しろ千名もの名士が招待されている中なので気がつきませんでした。伊藤公は私に近づいてきて、「僕を覚えているでしょう？」と聞かれました。私には見覚えがありませんでしたので、怪訝な顔を見ると、「伊藤ですよ。忘れちゃったの？」とおっしゃいました。彼はもう押しも押されもしない大政治家になっていました。維新の三傑といわれた西郷隆盛さん、大久保利通さん、木戸孝允さんはみんな亡くなっていました。もう伊藤公に怖いものはありませんでした。天皇陛下でさえも怖れていらっしやらなかったのです。伊藤公は外国人記者から、「あなたにとって天皇とは何ですか？」と質問された時、ジェスチャーで「操り人形ですよ」と答えたといいます。そして翌年、彼は初代総理大臣になり、事実上日本の「征服」を果たしました。

パーティーが終わって数日後、伊藤公は父に依頼し、私に、住み込みで、それも家庭教師としてではなく客人として、奥様とお嬢様に英語と西洋の風俗習慣を教えてやってほしいと言われました。その時、伊藤公は43歳、私は20歳でした。

オリバー：伊藤博文宅での居心地はいかがでしたか？

梅子：伊藤公はとても親切で、最高の待遇を受けました。夢のような生活で、私にはもったいないくらいでした。たとえば、夕食時には日本人としては異例とも言える食事で、スープ、魚、2種類の肉と野菜、デザートにはフルーツといった具合です。こんなメニューは私には不釣り合いでした。それに、外出するときにはいつもたくさんの護衛が付いてくるんです。

オリバー：伊藤博文といえば、第二次世界大戦で日本人を苦しみと破壊のどん底に陥れた元凶、明治憲法の起草者ですが、その人物と同じ屋根の下で生活

した経験を持たれるあなたに、もう少し彼の話を聞かせていただきたいのですが、彼の人生で一番の興味は何だったのでしょうか？

梅子：私たちはいろんなことを話しました。あの方の興味、そうですね、日本を社会的、道徳的、政治的に、また教育の立場から進歩させたいと思っていたらっしゃる人でした。学校創設にも興味を示してくださいました。また、私の日本語をもっと上手にして日本の女性のリーダーになさりたいかったようです。キリスト教のことも話したことがあります。あの方はクリスチャンではありませんでした。仏教徒でもありません。神道を信じていらっしゃるわけでもありません。無宗教の人でした。でも、キリスト教にはほかの宗教より優れた道徳と教えがあると思っていたらっしゃいました。キリスト教のことは何も知らないから、もっと知りたいとおっしゃっていました。

オリバー：日本の歴史を振り返ってみますと、明治憲法は悪の根源であったとききましたが、あの憲法のどこが悪かったのだと思われますか？

梅子：ご存じのように、明治憲法は伊藤博文公と3人の協力者、井上毅氏、金子堅太郎氏、伊藤巳代治氏とで起草されました。伊藤公はこの憲法を不動のものとするために天皇の名を借りて欽定憲法としたのです。しかし、天皇を神聖な存在として奉ることにより、国民を臣民として蔑視したといえるでしょう。

オリバー：この憲法は民主的なものではなかったのですか？

梅子：はい、民主的とはいえません。もっとも、伊藤公は民主的に見せようと努力されましたけれども。表面的に見れば、言論の自由、宗教の選択の自由、集会の自由を唱っています。しかし、事実上、民主的なものではありませんでした。実際、言論の自由は侵されていたし、キリスト教は迫害を受けました。また、団結して抗議行動を起こす自由もありませんでした。伊藤公は、「法律の範囲内において」とか、「法律の定めたる場合を除くほか」という言葉を加えることによってうまく逃げました。そして、憲法以外の法律を作って事実上

すべての自由を無効にしてしまったのです。

オリバー：何と巧妙な！

梅子：ええ、それに彼は総理大臣の役割と権限の項を憲法からはずしてしまいました。草案作成中はちゃんとそれを規定して、入れようと思われてたんです。それは、ご自分が総理大臣だったから問題はありませんでした。ところが、この憲法発布は1889年(明治22)ですが、その時にはすでに伊藤公は総理大臣の席を譲り、一ランク上の枢密院議長になっていらっしゃったのです。それで、総理大臣に大きな権限を与えて、それを憲法に記載することは天皇の地位を危うくする危険性がある、ひいては自分の地位も危うくなると判断され、それを削除されたのです。公は徳川幕府の敵対者として、その崩壊を目の当たりに見た人です。この明治維新の大きなうねりの中をかいくぐって多くのことを学びました。一度手にした権力はどうしても手放したくなかったのでしょう。細心の注意を払って憲法作りをやられたようです。

オリバー：その総理大臣の役割と権限の項を省いたことが日本の歴史上、大きな影響を与えたのでしょうか？

梅子：ええ、もちろんです。伊藤公の生存中は、問題は表面化しませんでした。彼の死後、軍部がこれを利用して、総理大臣が決めたことであっても軍部はこれを拒否できると解釈したのです。軍部は天皇の所有物であるので、「陛下の軍隊」も天皇同様に「神聖」だというわけです。だから軍部に反対することは天皇の「統帥権を干犯する」ことになることと宣伝したのです。その結果、日本は軍部と政府とが張り合う、二頭獣のようないびつな国家になりました。しだいに軍部のほうが勢力を伸ばし、侵略戦争に躍起になり、朝鮮を強引に併合し、中国にまでも食指を伸ばし、無差別大量殺戮の限りを尽くしました。ついには太平洋戦争に至り、日本全体を、国民もろとも奈落の底に突き落としてしまったのです。

オリバー：伊藤博文は1909年(明治42年)ハルピン駅で韓国の愛国者、安重根に暗殺されましたが、その時あなたは「伊藤公の思い出」の中で次のように書かれています。

伊藤公は他界された。世界は有能なる外交官を亡くした。雄弁なる弁舌家を、偉大なる政治家を亡くしてしまった。私は今思う、あの寛大な心、快活なる精神、そしてあのお人柄。これこそはおそらく、偉大な人物の持つ、最も偉大な所産であつたろう。

この文を読むと、あなたは伊藤博文を好意的に見ていらっしゃるようですが、これは、韓国・朝鮮人が持つ伊藤像とはまったく異なっています。彼らは伊藤博文を極悪人だと考えていますが、どうしてこんな違いが生じるのでしょうか？

梅子：考えられるひとつの理由は、伊藤公という人は、身内には優しいが敵には冷たいというタイプの人でした。自分の家族や弟子の面倒は良く見られていましたが、朝鮮人に対しては恐ろしく冷酷でした。彼が韓国で敵意をもたれている理由は、朝鮮人にとって屈辱的なあの日韓併合の張本人だったからです。彼は博愛主義者ではありません。モラルの高い人ともいえません。このことは多くの女性が証言できるでしょう。彼は貧しい村の百姓の倅として生まれ、日本社会の低い身分から身を起こし、総理大臣というトップの座にまで昇りつめた人です。あまりにも急に富と権力を一身に集めたためか、政治家として、民主主義とか国際主義の本当の意味がわかっていっしやらなかったと思うのです。一国の指導者たるものは、国民に奉仕し、国民の権利を尊重する姿勢がなくてはなりません。国家間における対処も同じ原則でおこなわれなくてはならないと思います。

オリバー：わかりました。では話題を変えますが、あなたが伊藤家にいた間に捨松さんが結婚しましたね。この結婚についてのご感想は？

梅子：はい、捨松は当時、軍人として稀な名声と榮譽を得ていた政治家、大

山巖氏と結婚しました。彼は維新の第一人者、西郷隆盛の従兄弟に当たる人なんです。当時、陸軍大臣でした。フランスに学び、その頃の他の政治家とは違って酒も飲まず、女遊びもしない立派な人でした。ユーモアのセンスの分かる紳士でもありました。しかし皮肉なことに、大山氏は会津藩攻撃のときの官軍の指揮者だったのです。捨松は会津藩家老山川家の娘で、鶴ヶ城に籠もり、官軍と戦いました。当然のことながら、山川家はこの二人の結婚には反対でした。また、たしかに大山氏は優しい人でしたが、二人の間には愛などというものは存在しませんでした。大山氏には地位と名声が、捨松には知性と美とがあったわけです。捨松は、大山氏を取るか、自由と独立を取るかの選択に迷いました。そして結局、大山氏を取ったのです。彼女は、彼のような有力な人のもとで初めて、自分の能力を最大限に発揮できると結論づけたのです。このようにして二人の結婚に至りました。

オリバー：捨松さんが結婚されることを聞かれてどう思われましたか？

梅子：ホンネを言わせてもらえば悲しかったわ。大山氏のような人と結婚すれば、私とはもう別世界の人になってしまいますもの。なにしろ、名士の奥様ですからね。女子教育と一緒にやろうといったことが実現不可能になるんじゃないかと思いました。彼女が援助の手を差し伸べてくれることは分かっていたんですが、陸軍大臣夫人としての彼女の立場がありますもの、二人の夢の実現に今までのような協力は期待できないのではないかと思ったんです。

オリバー：二人の夢とは？

梅子：女子教育です。私はそのとき華族女学校の教師をしていました。アメリカで捨松の面倒を見てくれた家族の末娘アリス・ベーコンと一緒に、女子教育の発展を祈りながら教鞭をとっていました。

オリバー：それで、この華族女学校に全精力を傾けたのですか？

梅子：いいえ、そうではありません。この学校には不満がありました。

オリバー：どういった？

梅子：私は英語を教えるのは好きでした。でも、ただ英語の知識を与えるだけでは満足できませんでした。政府は何のために大金を出して私を留学させたのでしょうか。私を単なる英語教師にするため？ そんなはずはありません。当時の日本の女性の状況を考えてみてください。女性は男性の慰み物にすぎませんでした。美しい飾り物であればそれで良かったのです。多くの男性は女性の教育なんて不必要だと思っていました。華族女学校の目的はこういう考えを華族の子女に教えることだったのです。

オリバー：そういった考えをどうやって変えようと思われましたか？

梅子：私はもう一度アメリカに行って、大学で何か専門分野の勉強をしてみようと思いました。何も学者になりたいと思ったわけではありません。できるだけ真理の探究に時間を費やしたかったのです。アリスも賛成してくれ、校長からの許可もいただきました。

オリバー：大学はどうやって選んだのですか？

梅子：私が帰国してからも文通をしていた、ウィスター・モリス夫人の紹介です。プリン・マー大学の学長、ジェームズ・ローズ氏に話していただきました。学長には、私の入学許可をいただいた上に、寮の一室を無料で使用させていただきました。

オリバー：プリン・マー大学はどこにあるのですか？ また、どんな大学でしたか？

梅子：フィラデルフィアの北西10マイルのところにあります。1885年(明治18)に創設されています。私が入学したのが1889年(明治22)、26歳の時です。生徒数は150名ぐらいでした。著名な教授がそろっており、質の高い教育を誇っていました。そこで生物学を専攻しました。プリン・マー大学にいた最初の2年

間のうち、半年をオンタリオ河畔のオスウィゴ師範学校で過ごしました。2年後、日本の学校に一年延期を申し出て、許可が下りましたので、最後の一年はまたブリン・マー大学で過ごし、生物学の研究を続けました。勉強した他の科目は化学、世界史、哲学、政治経済、そして英文学でした。

オリバー：学生時代の成績が何か残っていたら、お見せできないでしょうか？

梅子：ええ、ありますわ。ローズ学長が次のように書いてくれました。

津田梅子は本校に二年半学び、1892年6月修了する。その間学生として、歴史、生物学、英文学、化学、政治経済、哲学を学び、すべての学科において優秀な成績を修めた。特に生物学と化学において優れた研究成果を上げ、その基本原理を理解した。津田梅子の英語力は極めて優れており英語教師に適任である。彼女は本校で女性としての美德をいかに発揮し、本校職員並びに学生たちの尊敬と賞賛を勝ち得た。

オリバー：努力と勤勉が実を結びましたね。成果に満足されていることでしょうかね。

梅子：ええ、でも同時に、日本の女子学生たちにも同じ機会を与えてあげたいと思いました。このことをモリスに相談すると、「それは名案だわ。奨学基金を募ったら？8000ドルもあれば利子で1年分の授業料は大丈夫だわ」と言って委員会を設置してくれました。そして、「日本人女学生のためのアメリカ基金」という名で募金を始めてくれたんです。ここに、そのことを報じた新聞の切り抜きがあります。

津田梅子嬢は目下ブリン・マー大学の特別研究生の日本女性であるが、日本女性のための奨学基金を計画、8000ドルを目標に募金を始めている。日本女性に、アメリカで4年間教育を受けさせ、帰国後、女子教育に当たらせようというものである。資格さえあれば、女子教育に献身しようと望む日本女性は多い

だろうが、日本の高等教育機関は女性には門戸を開いていないため、研究の機会が得られず、また外国留学のための手段もない現状である。志ある日本女性が、適切な訓練を受ければ、女子教育にとって、外国人にましてふさわしいだろうことは、言うまでもない。日本の女子学生を良く理解し、通じあえる点で自国の女性に勝るものはありえない。

これにはかなりの反応があり、帰国するまでには希望額に達することができました。本当に、アメリカの人々の献金には心から感謝しております。

オリバー：3年の留学の後、帰国されたのが1892年(明治25)、そして、もとの華族女学校で教鞭をとられたわけですね。それから以降はもう外国には行かれませんでしたか？

梅子：いいえ、三度参りました。最初は1898年(明治31)、アメリカとイギリスに1年間滞在しました。次が1907年(明治40)、アメリカとイタリアでした。これは1年間の静養の旅でした。最後が1913年(大正2)、アメリカに半年間の旅行をしました。これはニューヨークのモホンクで開催された国際キリスト教学生連盟の大会に出席するためでした。

オリバー：最初の旅について、もう少し詳しく話していただけますか？

梅子：はい。これはコロラド州デンバーで開催された女性同盟協会総会に参加するためのものでした。この協会の副会長、アリス・アイブズ・ブレッドさんは、総会に日本の女性を招待したいと思い、伊藤総理大臣などの有力者を動かして、ふさわしい代表者を探していました。そして渡辺筆子と私とが選ばれたというわけです。この旅行のことは出発のほんの1週間前に知らされました。6月5日に、あわただしく日本を発ち、タコマを經由してデンバーに着いたのが6月23日でした。

オリバー：そこで何をなさったのですか？

梅子：まず、スピーチをしました。

オリバー：それはおもしろい。できればその時のスピーチを拝聴したいものです。

梅子：じゃあ、ここで再現してみましょうか。私はアメリカ人の前でこう申しましたの。

議長並びに会場の皆様。私たちへの暖かい歓待、副会長の親切なお言葉、そしてまた、この大会に出席する機会を与えて下さったことに対して感謝の言葉も見いだせないくらいです。こうして皆様の東洋の隣国である日本の代表として皆様の前に立つことは「極東」の女性の誇りでもあります。これからの日本の使命は進歩と文明の先駆者となることだと考えます。日本は多くの点でアメリカの暖かい友情と同情に支えられてまいりました。これからも日本女性の向上のためになることを学びたいと思っております。本大会の副会長ブレッド女士のお招きに預かり、友人の渡辺嬢とともに、皆様方の組織と、アメリカ国内の会の運動視察のために本大会に出席させていただきました。

今日本では女性の進歩的運動に対して民衆の感情は好意的なものになっております。それも皇后さまみずから、あらゆる努力を払って日本の女子教育の向上に努めていらっしゃるからです。私たちがここにいることそのものが女性の仕事に対する日本国内の感情を如実に表しているものです。といいますのも、今回の渡米は日本の指導者の許可と共感を得ているばかりか、勤務校の共感をも得ているからです。私の校長も、学期の途中で職場を留守にすることについてあらゆる便宜を図ってくれました。ブレッドさんが日本でお会いになった大隈伯は温かい承認と援助の手を差し伸べておられます。また奥様もこの連盟の名誉会員になられました。これらはすべて短い日本滞在中にこの連盟の目的と女性の仕事の大切さを日本の指導者に説かれたブレッドさんのお陰だといえるでしょう。ブレッドさんが文部大臣の外山博士や大隈伯と話して下さったことが、私たちの渡米という前例のない結果を生み出したのです。彼女が直接、間接に日本のためにどんなに働いて下さったかは言葉では言い尽くせないほ

どです。私たちのために尽くして下さった彼女の無私の努力に対して心から感謝の意を表したいと思います。私たちは本会議に出席した後、しばらく貴国に滞在し、連盟のすばらしい活動をできるだけたくさん見せてもらい、教育施設をも視察して我が校の教育の参考にしたいと願っております。

極東から参りました私どもはアメリカ到着以来、賞賛と感嘆の毎日を過ごしております。この驚きには、この地に初めて来たときのようなみずみずしさがあります。この広大なアメリカ。汽車と汽船を利用して何時間もかかってこの町までたどり着きましたが、まだ大陸の半分にもなっていません。そして、すばらしい設備が整っている豪華で快適な旅、また都市の豊かさと美しさには大きな感動を覚えました。アメリカを訪れるすべての訪問者が感じる賞賛は別にいたしましても、物質的なすばらしさを見ること以上に心を満足させてくれるものがあります。それはアメリカの進歩的女性たちとこうして心を通わせることです。私たちは、友人、雑誌、書籍を通じて、過去数十年の間に女性の勤労と教育の分野ですばらしい進歩が遂げられたことを存じております。そこで私たちみずから、その現場をみせてもらって、世界の進んだ女性たちが、女性の進歩のために各分野でどんなことをなさっているのかを学ぶためにやって参りました。私たちにこのような機会を与えて下さったことに対してどんなに感謝してもしきれぬものではありません。皆様方からいろいろと親切にいただいたこと、心温まる歓迎、友好的な歓待、見せていただいた研究機関、短期間ではありましたがこの組織から得た研究成果、皆様方の熱意と情熱から生まれた進歩、これらすべてのものを私どもは忘れずに日本に持ち帰るつもりであります。

私どもは皆様のご親切を、個人的なこととしてではなく、西洋の女性の東洋の女性に対する援助として、アメリカの女性の日本の女性に対する暖かい歓迎として祖国に持ち帰りたいと考えております。すべての国家は他の国家について学ぶ必要があるように、日本は、進歩の決意があるのならば、外交的または商業的な関係だけでなく、女性の家庭や進歩に関する問題にとどまるのではなく、国民の進歩につながるすべての分野において、女性の国際的連帯を強めて

いかなければなりません。今はまさしくこうした進歩のための画期的時代といえましょう。私には予感がいたします。将来日本の女性も立ち上がって、女性の最善を求めて戦う運動の主導権を握り、今度は東洋の他の国々の女性たちに援助の手を差し伸べ、立派な模範を示す日が来るのもそう遠くない、と。このようにして教育と女性向上の仕事は国から国へと受け継がれ、世界中の女性は、一步一步前進し、野蛮な時代の奴隷と労役から開放され、次の時代の玩具と慰み物からも開放され、真の意味の男女同権が確立されるものと信じます。

日本の女性を代表して、私どもに与えられたこの機会と心温まる歓迎に対して心からお礼を申しあげます。

オリバー：あるアメリカの新聞記者があなたのスピーチを次のように評していました。

私が感動したものは、今日の小旅行に加えて、昨晚の小さな日本夫人のスピーチであった。ブレット夫人の尽力でこのような天性の夫人を総会に招くことができたことを感謝せねばなるまい。彼女のスピーチは今までの総会のスピーチの中でも最も優れたものであった。思想の流れ、その述べ方、態度、抑揚、どれをとっても最高である。

良かったですね。デンバーの旅は大成功でしたね。会議の後はどうなさったんですか？

梅子：ワシントンのランマン夫人に会いに行きました。3年ぶりの再会でした。ランマン氏に先立たれて5年経っていましたので、彼女はやつれて寂しそうでした。昔は人と一緒にいるのが好きな人でしたが、もう訪問客も稀で、家の手入れもいきとどいていませんでした。私はできるだけ彼女の側についてあげて、一緒に静かな時を過ごしました。

オリバー：アメリカ滞在はどのくらいでしたか？

梅子：半年でした。でも、帰り支度をしている時、予期せぬ出来事が起こっ

たんです。父からの手紙で、イギリスの名士の方たちが筆子と私をイギリスに招待したいとのことだったんです。日本駐在のイギリス公使アーネスト・サトー卿を介して大隈重信伯に相談されました。大隈伯は政府としてはこの考えには賛成だからといって、2000ドルの送金をしてくれました。イギリスは全費用を持つと言っていたのであんなことは必要なかったのですが。更に大隈伯のはからいで、11か月間の休講許可をいただきました。あいにく筆子は病気にかかり一緒に行けませんでした。私は、11月5日、ニューヨークを後にしてリバプールへ向かいしました。

オリバー：イギリスではどんなことをなさったのですか？

梅子：いろんな所へ連れて行っていただきました。ロンドン塔、セント・ポール寺院、ウェストミンスター・アビー、クイーンズ・カレッジ、トリニティー・カレッジなどです。また、名士の家庭にも招かれました。本で読んだことのあるうわさに聞いていたあの貴族の方たちの家族でした。私はこんな機会を与えていただいたこと、とても感謝しております。でも、同時に人生のむなしさを感じることもありました。パーティーに何を着ていくべきか、こんなことを必要以上に気にかける貴婦人たち。何日もかけて贅沢三昧な旅行をする英国紳士。私は何も、彼らの華麗さや虚栄を見たくてイギリスに行ったわけではありません。アングロ・サクソンの文明がどんなものか、また、その文明を造りあげた国民の力強い精神とはどんなものか、それが知りたかったのです。金持ちで贅沢な生活ではなく、堅実で嘘のない生活を見たいと思っていました。

オリバー：イギリスで最も印象深かったものは何ですか？

梅子：いろいろありましたが、今でも忘れられないのはフロレンス・ナイチンゲールとの出会いと、励みとなった彼女の言葉です。私はこの婦人に会う光栄を得ました。今でも昨日のようにはっきりと覚えております。あれは1899年(明治32)5月20日のことです。ハイド・パークの近くのサウス・ストリートで馬車を下りました。外は雪でした。ナイチンゲール女史は小さなビルの4

階に住んでいらっしゃいました。初めてお会いしたときの言葉は「こんな雪の中をいらしてくださってありがとうございます」でした。明るく、広い部屋に通されました。壁には絵が掛けられ、テーブルには美しい花が飾ってありました。彼女は白いじゅうたンを敷いた床に座り、にっこり笑っていらっしゃいました。「私のようなものに会ってくださってありがとうございます」と私が言うと、「いいえ、こちらこそ」と言って微笑んだ顔が浮かんできます。

二人でいろんなことを話しましたが、特に、私がお話ししたかったのは日本の女性の地位が徐々に向上しているということでした。

「日本の女性が社会で働けるようになったのはつい最近のことですよ」

「私どもも40年前は同じでしたわ。女性の世界はとても狭かったのです。親が娘のことで心配するのは結婚のことだけでした。私の母も例外ではありません。」

長い間話をして、もう、おいとましなければと思い、そのことを告げると、「こんな雪の中を帰れるものですか。もっとゆっくりしてらっしゃい」と言っていただきました。それでも私は「ご心配はいりません。馬車に乗って帰りますから」と言って、おいとましました。帰り際に花束をいただきました。本当に今でも忘れられない訪問でした。彼女のまなざし、ほほえみ、後光の射すようなお姿。80歳とは思えない方でした。私は彼女にお会いしたことで多くのことを学びましたし、夢の実現に一步近づいた気がしました。

オリバー：夢といいますと、あの女子教育のことですね？

梅子：そうです。

オリバー：どうやって夢の実現は始まったのですか？

梅子：帰国してから華族学校で1年間勤務しましたが、それを区切りに15年間勤めたこの学校を辞めようと思えました。私の考えに反対の人もいました。女性一人で、こんなに安定した、居心地の良い職業をやめて新しい学校を造る

なんてとんでもない、と言うのです。しかし、支援者もいました。寄付金を申し出る人もいたくらいです。でも寄付金は丁寧にお断りしました。私はゼロから始めるつもりでしたから大きな資本は必要なかったんです。

オリバー：ゼロからと言われましたが、最初は、何人ではじめられたのですか？

梅子：10名です。

オリバー：新しい学校の教育理念と言いますか、どんなことを目標にされたのですか？

梅子：私は前の学校で教えている間、真の教育とは何かと言うことをいつも考えていました。今、一つ強く感じることは、教育は立派なビルや施設がなくてもできるということなんです。これは何も私が教室や本や図書館なんかどうでもいいと思っているということではありません。これらは大切なものです。でも、教育には、もっと大切なものがあるということなんです。それは、教師の情熱と質であり、生徒の学習意欲だと思うんです。最低これだけあれば教育は可能です。なにも、ハイテクやインテリジェントビルがなくても教育はできるということなんです。もうひとつ考えることは、大教室で多くの学生を教えても大した成果が得られないということです。知識の切り売りはできるでしょう。しかし真の教育は生まれません。真の教育が生まれるには、一人一人の生徒の個性に合わせて対処していかなければなりません。教育は、生徒の顔、態度、気質がみんな違うように、十人十色です。だからこそ、教育は既製品を与えるのではなく、教師と生徒が一緒になって作っていかなければならないものです。大教室ではこんなことはできませんもの。

私はひょんなことで幼い頃、国費でアメリカへ行かせてもらい、教育を受けました。帰国してから、自分の借りを次の世代の人たちに返そうと思いました。それには、女子教育の分野で一番貢献できるのではないかと思ったんです。私が帰国したときの日本は今の日本とは大違いでした。女性の勤める学校もなかっ

たし、外国で得た知識を女性が活用できる機会など皆無と言ってもいいくらいでした。でも、時が経つにつれて、女子教育に対する理解がだんだん進んできました。私の学校のひとつの目標は、私が出たものを生徒と共有することであり、英語教師になる確実な道を保証してやることでした。こういった学校は次の世代のために必ず必要なものだったんです。それで、アリス・ペーコンや捨松、その他の先生方の助けを借りて、長い航海の第一歩を踏み出したというわけです。

オリバー：そして、やっと、その努力が報われましたね。あなたの学校は発展し、日本の名門女子大、津田塾大学として現在確固たる地位を築いています。今どんなお気持ちですか。

梅子：そうですね。私の学校がまだ続いているだけで満足です。私が今の学校に希望したいことは、ただ、初心を忘れないでほしい、ということです。つまり、真の教育とは何かをいつも考えていただきたい。学校を大きくすることばかり考えたり、教育で一儲けしてやろうなどという考えは絶対に慎んでほしいですね。

オリバー：ついに夢を実現され、教育者としての役割を十二分に果たされたわけですが、過去を振り返ってみて、今どのようなお気持ちですか？

梅子：私は運が良かったと思いますわ。あらゆる教育の機会を与えられたんですもの。日本政府からは全面的な支持をいただきました。まるで地獄から蜘蛛の糸で助けられた女性みたいです。でも、私一人で逃げたくありませんでした。戻って全女性を救ってあげたい気持ちでした。でも、私の力不足でそれができませんでした。確かに事情は変化し、以前と比べれば良くなっていますが、まだまだ改革の余地はあります。今の私の夢は男女が手を取りあって、お互いに尊敬し合い、人種や性や民族などで、仕事やお給料の差別をしない世界ができる日を見ることです。

オリバー：むめさん、貴重なお話、ありがとうございました。とても楽しい、有意義なひとときでした。

梅子：オリバーさん、どうもありがとう。私の方こそ楽しませていただきました。